

アフリカ系アメリカ人に関する「アンクル」と 「アーント」の使用について

日吉和子

アフリカ系アメリカ人関係の文章を読んでいると“Uncle Tom”と言う言葉に遭遇することがある。これは人名の「トム叔父さん」そのものではなく、アフリカ系アメリカ人（これ以降黒人と呼ぶ）の間で「白人に迎合する黒人」を意味する場合が多く、この言葉が1852年ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人が書いた『アンクル・トムの小屋』の中に登場する黒人の主人公に由来することは良く知られている。本として出版された初年度だけで30万部を売る大ベストセラーになり広く奴隷制度の実態を知らせ、奴隷制廃止運動に拍車を掛けたと言われている『アンクル・トムの小屋』の主人公の名前が後の時代の黒人達により否定的意味合いで使われるようになったのは歴史的皮肉と言うべきであろうか。それとも奴隷制度を実生活の中で長期に渡りつぶさに観察した経験が無いストウ夫人が描いた黒人奴隷の登場人物や彼等の言動自体が既に固定観念化していた批判も否定できないので、当然の歴史的修正がなされただけと言うべきなのであろうか。少なくとも奴隷制度の中で生きている主人公の生き方がその制度の非人間的側面を暴くものであったとしても、彼自身はその小説の中で奴隷制度打倒の為に立ち上がったわけでもなく、その隷属する自分の身分から積極的に逃げ出そうとしたわけでもない点を考えると彼の生き方は根本的にはその状況を受け入れる“passive”な態度であると評価されてもしかたがない部分があるのも確かである。それに加えて短期間で非常に多くの人間に読まれたことによりストウ夫人が造り上げた黒人奴隷に対するイメージだけでなく、「アンクル・トム」と言う名前も同時刻に当時の人々の脳裏に焼き付けられたことも明白である。そして爆発的な売れ行きの中でこの名前だけが流行語の様に一人歩きして、奴隷制の悲惨さを表現する場合にパトリシア・ターナーが彼女の本『セラミック・アンクルズ・アンド・セルロイド・マミーズ』の中で言っている様に「必ずしもいつも実際の小説に基づかれていますわけではない想定事項を誘発するように意図された比喩的表現⁽¹⁾として当時の人々の間で用いられ、それを1つのきっかけとしてストウ夫人の書いた主人公が肯定的から否定的な人物像に変化する第一歩が踏み出された可能性が考えられるのである。他の可能性を探りながら、この「アンクル」の付いた黒人の名前についてさらに詳しく考えてみることにする。

奴隷制時代には一部の例外は除き、黒人奴隷はファースト・ネームだけで呼ばれており、同じ名前を持つ白人と区別する場合にはそのファースト・ネームの前に“Black”とか“Nigger”と言う言葉を付け加え“Black Joe”や“Nigger Jim”の様に呼ばれていた。そして“Mister”や“Miss”の様な白人には用いられていた称号は適用されなかった。そこで周囲の白人や黒人達から愛され、一目置かれる様な年配（英語では“elderly”や“old”と言う単語を用いており、少なくとも中年の末期を過ぎた年齢を指し示すと考えられる）の黒人奴隷に対して一種の称号として“Uncle”と、それと対になる“Aunt”と言う言葉が1820年代から30年代に黒人の名前の前に付けられるようになったと言われている⁽²⁾。当然それは年齢とは関係無く、姻戚関係の中で一般的に使われる「叔父さん」、「叔母さん」とは意味を異にするのである。一方黒人奴隷の場合にはそれとはまったく逆で、姻戚関係は無く、年齢と関係があり、それもかなりの年齢を感じさせる言葉であった。それで『アンクル・トムの小屋』の日本語翻訳版の中では“Uncle Tom”は「トムじいさん」と訳されることになったのは当然の結果と考えられるのである⁽³⁾。

しかしその言葉のその様な使われ方は少なくとも南部では一般的に知られていたはずにもかかわらず、ターナーが彼女の本の中で指摘している様にストウ夫人はアンクル・トムの年齢を曖昧にしているのである。ターナーはアンクル・トムは「広い胸と艶のいい黒い皮膚をし、体格もがっしりした男だった」⁽⁴⁾し、彼がエヴァを助ける段で「胸幅のある腕っぶしの強い男には、水に浮いていることなどなんでもなかった」⁽⁵⁾し、さらに多分全員が5才以下と思われる3人の小さな子供がいるとストウ夫人は書く一方で、妻のアーク・クロウには彼の事を“old man”⁽⁶⁾と呼びさせている点を挙げ、明らかにストウ夫人は年齢を分からなくさせていると述べている。その理由に関してターナーはストウ夫人は読者の同情を喚起する為彼の性格の強さや信頼度を強調し、「その能力は奴隷制度擁護の南部人により積極的に助長されていた怠惰な奴隷の固定観念を否定する、勇敢で肉体的に力のある英雄を生み出している。現代の大衆文化の中の年配の前屈みの動作のゆっくりとしたアンクル・トムではストウにより求められた政治的目的を決して満たすことはできなかったであろう」⁽⁷⁾と分析している。ターナーが指摘する“old man”に関しては一般的に「夫、亭主」を意味する言葉であるので取り立てて問題にすることは無いであろう。しかし肉体や家族構成から推測される年齢は働き盛りの中年までの男を示唆しているのは確かである。結局、白人を含めた周囲の人々から一種の敬意の念を持って処遇される様な存在を強調する為にはアンクルと言う言葉が必要であったが、その称号が一般的に暗示する年齢では奴隷制度の悲惨さを伝える出来事の衝撃度、劇的度を弱めてしまうと考えたのであろう。たとえば白人所有者の都合で家族が離散する悲劇も成人した子供達との別れよりも幼い子供達との別れの方がより同情を誘うと考えるのは自然である。その結果その政治目的に沿ってどちらかと言えば若い肉体と家族を持ちながらも、それらとはアンバランスに思える称号を持つ主人公が作り出されたと言えるであろう。これは彼の妻のアーク・クロウに関しても言える事である。それでこのアンバランス

を修正した結果、小さな子供達を持つ、エネルギッシュな妻としてのアート・クロウは日本語翻訳本の中では「クロウばあさん」では明らかに読者に違和感を抱かせるので、「クロウおばさん」と翻訳されることになったと解釈できるのである。

しかし奴隷解放によりその本来の政治目的が達成され、白人が主流の社会の中でその政治熱が冷めるにつれ、今度は白人と平等の地位が与えられた黒人達を実生活の中でどの様に処遇するかの問題が新たに生まれ、奴隷制度が現実の時の流れの中だけでなく、意識の中でも過去の出来事として遠ざかれば遠ざかる程、その小説は奴隷制度に反対する衝撃的で、強力で、象徴的な小説から次第に前者2つの修飾語が薄れて行き、同時にアンクル・トムは奴隷の英雄的人物から単なる奴隷を象徴する主人公へと変身した可能性が考えられる。そしてどちらにも共通項の「奴隷」と言う社会的身分が残り、その名前から英雄的要素が抜け落ち、「アンクル」と言う言葉が本来伝える白人から愛される奴隷のイメージ、つまり自分の自由が無い状態に満足している様に見える従順で白人の言いなりになる奴隷のイメージの方が残ってしまったのであろう。この観点から考えるとストウ夫人が「アンクル」と言う称号を主人公の名前に付け加えたことでその後の意味の変化そのものの原因を作ったと言えるかもしれない。それでは以上に述べた原因以外になぜアンクル・トムが「否定的」なイメージになっていったのかをさらに解明する為にもこの“Uncle Tom”と同じ意味合いで黒人女性に対して用いられる表現で最も良く知られている“Aunt Jemima”について詳しく見てみよう。

これはデビス製粉会社が1893年のシカゴ万国博覧会で“Aunt Jemima”と名付けたパンケーキ・ミックスを宣伝販売したことから広く知られるようになった名前である。その時その会社はケンタッキー州出身でシカゴで白人の判事家庭で働いていたナンシー・グリーンと言う名前の黒人女性を雇い、彼女を「アート・ジェマイマ」に仕立てて、会場でパンケーキを作らせたことが大成功に結び付いた。さらにその後彼女が全米各地を回って、1923年に交通事故で死ぬまでその製品の宣伝を続けたことでこの製品名はもっと広く知られるようになった。そしてこの製品名はそのパッケージに印刷された「アート・ジェマイマ」とナンシー・グリーンが現実に扮した「アート・ジェマイマ」により造り上げられたキャラクター・イメージと一緒に人々に知られることになった。これは実に強力な宣伝効果をもたらしたと考えられる。さらにその会社は販売促進目的で「アート・ジェマイマ」の人形やパンケーキ用のへらなどの品物を景品として出し、一層人々の目に触れる機会を増やしたのである。

ところでその「アート・ジェマイマ」とは頭にバンダナを被り、白いエプロンをして、浅黒い肌で、ニグロイド人種特有の大きくて厚い唇と鼻をした、丸顔で白い歯を出して笑う、ふっくらとした体格の黒人女性であった。その「アート・ジェマイマ」は黒人女性全般に対する固定観念的イメージを植え付けただけでなく、黒人女性イコール「アート・ジェマイマ」の様な料理を作ったり家事をする使用人、明らかに白人に仕えるサーバントと言う社会的に低い身分のイ

メーヅも消費者の間に視覚的に固定化したのである。この様に「アーン・ジェマイマ」はアンクル・トムとは違って最初から「否定的」と後世の黒人達から批判される類いのイメージで登場したのである。さらにこの「アーン・ジェマイマ」はそのパッケージの顔から判断してもせいぜい中年までの年齢設定になっており、アーン・クロウの場合と同じく、「ジェマイマおばさん」と呼ぶ方が相応しいと思われるのである。結局この「アーン・ジェマイマ」により「アーン」が付いた名前の黒人女性の年齢イメージも社会一般的に固定化されることになったのではないかと考えられるのである。一方シカゴ万博直後にパード・ライトにより架空の人物である「アーン・ジェマイマ」の伝記がパンフレットの形で出版されるが、これは「アーン・ジェマイマ」製品の万博での実演販売の成功度を示すと同時に、その料理の上手な黒人女性のサーバントに元奴隷と言う社会的身分を明確に付け加えたと言える。そしてその抜粋が広告で使われることにより「アーン・ジェマイマ」のイメージはさらに否定的な方向に向かったと言えるであろう。それではその名前が伝えるそのイメージをもう少し詳しく見てみよう。

ケネス・ゴーイングズが彼の本『マミー・アンド・アンクル・モーズ』の中で引用している1920年のミズーリー州のアーン・ジェマイマ製粉会社による広告で彼女の伝記の内容を調べてみよう。「アーン・ジェマイマ」はルイジアナ州のプランテーションで料理を作っていた黒人奴隷で、南部中に彼女の料理上手は知られていた。そして南北戦争中の1864年に南部連合軍の将校とその当番兵が仲間からはぐれ、北軍から隠れ逃げていた3日目の朝、空腹の彼等が出会ったのが彼女であった。彼女は何も聞かずに、素早く彼等の前に山積み重ねられたおいしいパンケーキを出してくれたのである。それから20年後彼は同じ場所で昔のままの彼女を見付けた。彼女は前回同様に積み重ねられたおいしいパンケーキを出してくれたのである。そしてその一行の中に居た人物がミズーリー州のある製粉会社の販売代理人で、彼がその後彼女の所に戻って彼女のおいしいパンケーキのレシピを売ってくれるように頼み、彼女自らがその製造監督として来ることに同意して、彼女のパンケーキ・ミックスが一般に売り出されることになった⁽⁸⁾と言うのがこの伝記の内容である。

この伝記から伝わる否定的イメージとしてまず挙げられる点は彼女が“Aunt Jemima”と言う名前の“mammy”として言及されている事である。この“mammy”と言う言葉は小さな子供が自分の母親を呼ぶ時に使うのが一般的であるが、奴隷制時代に奴隷を所有する白人一家に仕えていた召使や子守の黒人女性を意味している。主としてその白人の子供達によって敬意の念や好意を持って使われていた。それゆえに「アーン・ジェマイマ」の伝記は“aunt”と“mammy”の2つの言葉を使って彼女を白人の主人一家に対して忠誠心がある黒人奴隷として二重に位置付けていることは明白である。

ところで“mammy”は日本語に訳すとすれば「ばあや」となってしまうが、実際には年齢を示唆する要素は含まれていない。一方“aunt”は既に述べたように年配の黒人奴隷の女性に対

して使われていた。しかしこの場合それが同一人物に使われている。つまり「ジェマイマおばさん」と呼ばれる「ばあや」と言うことになる。アート・クロウの場合にも言及したが定義上は中年を過ぎているべきであるのにどう考えても中年ぐらいの年齢の女性が「アート」付きの名前で呼ばれる原因はこの辺りにありそうである。つまり自分の世話をしてくれる黒人奴隷を“mammy”と呼んでいた白人の子供がある程度成長し、自分の置かれている立場や身分を意識した時、たとえ一般社会の年齢尺度からしたらその奴隷が若い、または中年の範疇に入るとしても、それまでの親しい関係を考えると直接名前を呼ぶことにはためらいがあり、少なくとも大人になり奴隷を管理する側になるまで当座の間“aunt”を付けて呼んでいる間にその呼び名が定着してしまった可能性が考えられるのである。少なくともその奴隷は白人の子供から見たら「かなり年上」と感じられるであろうから自然の成り行きの結果と言えるかもしれない。さらにそれに関連して考えられる事は実際の奴隷制度の中で奴隷の実年齢にそれ程注意が払われていなかったのではないかと言う事である。年齢よりも良く働くか、働ける体力はあるか、白人の主人一家に対して従順であるかどうかの方が問題となったであろうと推測されるのである。それで所有する中で一番古くから居る奴隷や年長者のグループに属していて、綿摘みが非常に早くて大量に収穫できるとか、おいしいパンケーキを作れるなど秀でた能力を発揮する奴隷がいた場合、ある程度年齢を大雑把に考えて“aunt”や“uncle”の称号を付けた結果それらの言葉の定義上の年齢とのずれが生じたのではないだろうか。この観点に立つとアंकル・トムやアート・クロウの年齢的ずれは既に述べた様に小説の作者のストウ夫人の政治的意図から生じただけでなく、この奴隷の年齢に関する当時の大雑把さの影響も受けていたのではないかと考えられるのである。そしてアートの場合は“mammy”との関連要因がさらに作用しているので一層年齢的ずれが生じやすかったのではないかと推測されるのである。

さて1920年の広告の伝記内容とその挿絵が暗示する彼女の2番目の否定的イメージを見てみよう。まずその将校が20年ぶりに彼女の所に立ち寄った時に乗って来た船の名前は奴隷制度を維持する為に南部連合軍を率いて戦った名将軍と同じロバート・イー・リー号である。次にその川に停泊するその大きな船を背景に歩いて来る山高帽にステッキを持ち、丈の長い上着にベストと蝶ネクタイを身に着けた3人の白人男性の絵はかつての奴隷制度があった南部の紳士を連想させる。さらに「アート・ジェマイマ」は南北戦争中の出会いから20年経ってもまったく年月や時代の変化も受けず、そっくりそのままの状態と場所で暮らしている。これらの点から見て、そこには昔の南部の健在性、存続への願望が歴然と現れている印象は拭えない。その中で元南部連合軍、つまり黒人達を奴隷状態に置き続けるために戦っていた人達が彼女の所に戻ってきた時前回同様大歓迎してパンケーキを出してくれるような彼女はケネス・ゴーイングズに言わせれば「過去について絶えず不平不満を言っている北からやって来た『生意気な』黒人たちの様では無かった。もちろんそれは神話的な黒人のばあやの顕著な特徴である、つまり彼女は皆を愛して全ての過去

の過ち、彼女自身を奴隷状態にしたことすらも許す」⁽⁹⁾類いの黒人であり、他の多くの解放奴隷達とは違って北部へ移動せず元のプランテーションにとどまった、元所有者にとっては「良い」と見なされる黒人であった。一方、元所有者達はその様な黒人を追い出すこともせず世話をしてくれるぐらい「良い」人々であり、その将校は奴隷制維持の為に戦った事で彼女の様な隷属状態にあった黒人達に対して何か悪いことをしたとしても、彼女の所に戻ってパンケーキの代金を金貨で払ったことで過去のパンケーキで救われたことに対するお返しは全て済んでいるとその伝記は示唆することにより、白人にとっては古き良き時代の南部への賞賛、南部神話がそこには感じられ、その結果南部神話に登場する白人に都合の良い“old-time Negro”⁽¹⁰⁾のイメージの積極的助長が見られるとゴーイングズは批判的に指摘している。確かにその広告からは白人側からの奴隷制度に対する罪悪感の類いはまるで感じられず、反対に白人擁護の立場に立っている印象の方が強い。そして料理を作って他の人に食べてもらうことに幸せを感じ、白人に隷属する自分の立場に関して依然として何も考えない「アート・ジェマイマ」は“old-time negro”に対して求められる全ての要素を満たしているのは明らかであった。

「アート・ジェマイマ」のこれら2つの否定的イメージはこのパンケーキ・ミックス製品とその商品名が1925年にクウェーカー・オーツ社に売却された後も続けて使われ、イメージの固定化に貢献し続けたのである。ゴーイングズによると、1950年代初めにクウェーカー・オーツ社が出した雑誌の全面広告の中でも依然として彼女の伝記が使われ、彼女は元のプランテーションに居て、川に行く巡業演芸船の芸人たちをプランテーションの所有者が供給する時においしいパンケーキを出していることになっている。ゴーイングズは「消費者がアート・ジェマイマが奴隷であることに満足しているのかどうか疑いを持つ場合を用心して彼女の幸せそうに微笑む顔が他の顔よりも4倍ほど大きく表示されていて」、「完璧なサーバント」⁽¹¹⁾の姿をしていると感想を述べている。しかしパンケーキの応用料理の写真が広告の3分の1以上を占め、大写しにされたフライパンがえしの上に乗った1枚のパンケーキは「アート・ジェマイマ」の顔の6倍以上あるのはもはや彼女のイメージを全面に出して商品名を印象づける必要がないほど消費者の間に浸透、定着していたことの証拠であろう。そして彼女の架空の伝記が紙面のほとんどを占めていた1920年の広告と比較すると、その彼女の奴隷としての過去の姿が広告全体に占める比重は少なく、どちらかと言えば素晴らしくおいしいパンケーキを生み出した黒人女性のサーバントの姿を回顧的に、付随的に示していると解釈でき、それゆえにこの広告について彼女の笑顔の大きさを問題にしたゴーイングズの意見は少々考え過ぎとも言えないこともない。しかし次の見地からすると彼の批判も一概に行き過ぎとも言えないのである。つまり、その広告の上部にある挿絵を詳しく観察してみると、まず第1に彼女の顔や笑顔や姿や服装は昔の広告とほとんど同じで、しかも彼女以外の人物は全て白人であることに気付く。そしてその白人達の服装がまさに南北戦争前の南部の白人社会を彷彿させるものであり、最後に給仕するのが黒人女性で、テーブルで給仕されるのを

待っているのが白人の男女であることが分かる。結局その絵は白人と黒人との間に社会的身分の上下関係があることを暗示する光景を、少なくとも白人に仕える黒人女性と言う否定的なイメージを無意識の内に消費者の心に刷り込んでしまう危険性をはらんでいたと言えるのである。

ところでその様に半世紀以上にも渡って同じコンセプトの「アーン・ジェマイマ」の広告が続けられてきたのは黒人に対する米国社会の姿勢がその間根本的には変わらなかった事を反映しているだろう。さらにこの間黒人女性の職種も根本的にはそれ程変化しなかったのも影響しているのかもしれない。この50年代頃はまだ実社会の中でも黒人女性の多くが白人家庭で子供の世話や家事などをする使用人や家政婦、そしてレストランなどでの料理関係など社会身分的に低いと見なされる職種以外の仕事を見付けることが難しい厳しい差別の時代が続いていたのである。しかし同じ50年代に始まり、60年代にピークを迎える公民権運動の影響を受け、社会全体が差別的表現に対して敏感になり、過敏になりつつあった。その後公民権運動の結果生じた差別待遇の是正やそれによる教育程度の向上から男女ともに黒人の活躍の場が徐々に広げられ、社会的地位が高くなり、白人主流社会に対して意見を述べ、是正を求める政治力を持つことができるようになる途上にあった。しかしそれらの社会的変化を受けながらも60年代以降も会社側は「アーン・ジェマイマ」製品を販売し続けたのである。その理由として2つの要因が考えられる。

第1の理由は会社にとって「アーン・ジェマイマ」がターナーが言う様に「大事にされてきたおいしい朝食と健全な生活の象徴」⁽¹²⁾であったからである。これをより現実的言葉で説明し直すとすれば、この商品名と製品は朝食用として半世紀以上もの間存続し、消費者の間に知れ渡り、売れており、いわゆる“brand loyalty”が確立しており、会社側としては全く新しい製品名を消費者の間に浸透させるのに掛かる費用と時間を考えると当時の人種意識の流れにもかかわらずその名前を存続させる方を選択したということになる。しかもその“brand loyalty”のかなりの割合が黒人消費者の間に確立していたと思われるのである。1980年代にその製品の購買者の55%が黒人であった⁽¹³⁾と言う数値は「アーン・ジェマイマ」が黒人であると言う事がそこに作用していると推測させるに十分である。その傾向は60年代当時も同じ様に見られたと考えるのが妥当であろう。それだからこそ「アーン・ジェマイマ」の名前と人種上のアイデンティティーを変えることはできなかったと言える。一方60年代以降パッケージに印刷されている「アーン・ジェマイマ」の姿は以前ほど丸々太ってもいないし、よりプロの様相を呈する様に改善され、バンダナはヘッドバンドに変えられ、さらに90年には「アーン・ジェマイマ」の頭を覆う物が完全に消えた⁽¹⁴⁾のは、その黒人消費者を失わずに商品名を存続させる為の企業側の努力であったと考えられるのである。そして現在店頭に並ぶ製品にはパーマをかけたとも見える髪形に、耳にはイヤリングをし、白いブラウスを着た、薄茶色の肌をした細面の顔立ちをした女性、白人と黒人の混血女性か、どちらかと言えば日に焼けた白人と見間違えそうな女性がパッケージの左上に小さく印刷されているだけである。そしてゴーイングズ流に言えば、“Aunt Jemima”と言う

商品名は彼女の顔よりも大きな文字で印刷されているのである。この事からしても、もはや「アール・ジェマイマ」の販売会社はその製品が誕生した過去の由来や伝記は表に出さずに、その名前と彼女の人種上のアイデンティティーを存続させる販売方針を採っていると判断できるのである。

第2の存続理由は60年代当時までに、「アール・ジェマイマ」自体がミッキーマウス化してしまっていて、変更するのが難しかったとも考えられるのである。彼女のミッキーマウス化は「アール・ジェマイマ」を演じるナンシー・グリーンが各地でパンケーキを目の前で作る、本物の人間を宣伝に用いる戦略に起因すると言える。それは彼女の死後も続けられ、ゴーイングズによると1930年代からはアンナ・ロビンソンが後を引継ぎ、商品に印刷される「アール・ジェマイマ」の顔も、1917年にナンシー・グリーンの実際の顔に倣って新しくされていたが⁽¹⁵⁾、それもアンナ・ロビンソンの顔に変更され、彼女が1951年に死ぬまでその顔がパッケージに印刷されていた。そしてその後のアイリーン・ルイスは1955年頃はもうディズニーランドでパンケーキを作っていて、60年代に入ってもそこを訪れた人々は「アール・ジェマイマ」のパンケーキを楽しむことができたと言う。これらの「生きているアール・ジェマイマ」を実際に見た人々の中には「アール・ジェマイマ」が実在の人物であるかのような錯覚に囚われた人もいるはずである。ゴーイングズもその点を指摘している。「アール・ジェマイマ」を実際に見た人達の多くが『『本物のアール・ジェマイマ』に会ったと信じていた。それから40年以上経ってインタビューを受けた時、人々は依然としてその出来事を非常に詳細に覚えていて、彼等が実際に本当のアール・ジェマイマに会ったわけではないと彼等を説得しようとしても考えをどうしても変えられないだろう』⁽¹⁶⁾と彼は述べている。それはアニメーション映画の中の登場人物であるミッキーマウスの格好をした人間扮するミッキーマウスにディズニーランドで出会った人が「本物のミッキーマウス」に会ったと感激するのどこか通じるものがある。製品のパッケージで見慣れている「アール・ジェマイマ」の場合は「ねずみ」ではなく人間であるのでその分「本物に出会った」錯覚の度合いは強くなるのかもしれない。とにかくこの宣伝戦略を通して「アール・ジェマイマ」は人々の心に鮮やかに記憶されることになるのである。その様な人々が存在する限り、たとえそれが否定的イメージを伝えると非難の標的にされる可能性が危惧されたとしても、商品名の変更は考えられない事であったと言えるだろう。とにかくこれらの2つの理由により60年代以降もその製品名は存続し、その為のイメージ改善努力が成されてきたのである。

それではその様に長い間に渡って維持され続けてきた“old-time Negro”を連想させる「アール・ジェマイマ」がそもそも奴隷解放宣言から30年を経た1890年代に出現し、当時の人々に受け入れられたのはなぜであろうか。その疑問を解く鍵はまず第1にその製品の命名者にあると考えられる。「アール・ジェマイマ」と言う名前はもともとは1889年にミズーリー州のセント・ジョセフに住むクリス・ラットが開発したベーキングパウダー入りのパンケーキ・ミックスに彼

が付けた商品名であった。そして彼は財政上の問題からその後会社をデイビス製粉会社に売却し、シカゴ万博での大宣伝となるのである。これが1890年代にこの名前が出現した第一の理由である。そもそも彼がその名前に決定した理由は当時その市で公演していたベーカー・アンド・ファレル一座の人気を博していた「アーント・ジェマイマ」と言う歌曲の題名がラットに「自然に美味しい料理を考えさせた」⁽¹⁷⁾からであった。つまりこれは「アーント・ジェマイマ」の名前がいわゆる条件反射的にラットに美味しい食べ物を連想させたことを意味している。それは当時「アーント」で始まる黒人女性の名前が伝える「美味しい料理を作る女」としてのイメージが既に白人の心の中にそれ程深く浸透していたことを如実に物語る出来事である。その浸透度こそ当時の人々にその製品を受け入れさせた原因の1つと考えられるのである。

ところでその連想イメージを浸透させることに多大な貢献をしたのが minstrel show である。それは白人が黒人の扮装をして黒人奴隷の生活を喜劇風に演じるショーで、1840年代から1920年代に人気のあった大衆娯楽である。その「アーント・ジェマイマ」の歌もその種のショーの中に登場したものである。このショーの起源として俳優の1人が黒人に扮して楽器のバンジョーに合わせて“The Gay Negro Boy”を歌った1799年にボストンで上演された“Oroonoko”と言う劇にまで遡る説⁽¹⁸⁾もあるが、その minstrel show と言うジャンルを生み出した人として名前が挙げられるのはトーマス・D・ライスである。彼は1828年にケンタッキー州で以前に南部で1人の黒人の歌い手から聞いたことがあった「ジム・クロウ」と言う歌を顔を黒くして、ぼろぼろの服を着て、黒人言葉で歌って踊ったのがその種のショーの始まりとされている⁽¹⁹⁾。

ライスがこの歌をショーの中で使ったことにより、単に平凡な男性の名前の“jim”とカラスなどの黒い鳥や黒を意味する“crow”が合体した「ジム・クロウ」と言う言葉は「無害で、頭の空っぽな陽気な黒人」⁽²⁰⁾だけでなく黒人全体をも総称する様になった。そしてこの言葉はその後差別や人種分離をも意味するようになり、1890年代に南部で続々と制定された黒人を差別する法を総称する際に用いられることになる。その点からも minstrel show で偏った、差別的な黒人描写が行われていたことは簡単に推測できるであろう。実際、minstrel show は奴隷制と白人にとっては古き良き南部がまだ健在であった頃に既に始まっており、奴隷制賛成の立場に立っていたと見なされている。それで奴隷の歌や踊りを真似て、黒人の動作や生活をおもしろおかしく風刺する際に、現実の差別意識が働き、歪んだ誇張表現が出現しやすかったのであろう。さらに白人の観客が抱いている既成イメージ、固定観念的イメージが彼等の好む様に誇張されたのは営業上自然の流れである。それでその種のショーの中からラットにより採用された「アーント・ジェマイマ」と言う製品名のイメージに最初から“old-time Negro”を連想させる固定観念的姿や身分が与えられていたのは当然の結果と言えるのである。そしてその種のイメージを見慣れていたがゆえに1890年代に登場した時人々に自然に受け入れられたと考えられるのである。

ところで“old-time Negro”の姿の「アーント・ジェマイマ」を誕生させたもう1つの原因

は同時にクリス・ラットに「おいしい食べ物」を条件反射的に連想させることになった原因でもある。その原因とは小説『アンクル・トムの小屋』である。それに関してターナーはその小説に登場するアンクル・トムの妻のアーク・クロウが「アーク・ジェマイマ」のイメージモデルとなっていると指摘している。ターナーはその小説の中でのアーク・クロウに関する「彼女の太った艶のある黒い顔はお茶のとき彼女がつくる焼き菓子のように、たまごの白味をつけたのではないかと思わせるほど、てかてかしていた。頭には、のりのきいた格子縞のターバンを巻き、その下にある肉づきのいい顔は、満足げに輝いていた。うち明けて言うと、クロウお婆さんは、村じゅうが認めているとおり、村いちばんの料理じょうずだったが、彼女にはそれに似つかわしいだけの、ちょっとした自意識も顔にほの見えていた」⁽²¹⁾と言う記述箇所を引用している。これは「アーク・ジェマイマ」についての記述と言っても通用するのは確かである。小説を読めばクロウお婆さんがおいしい料理や菓子を作っている、白人の主人一家に献身的に働く、自分自身の子供よりも主人一家の息子を優先するほど献身的な黒人奴隷の姿が伝わってくる。それ以前にもこの種の奴隷の存在についての噂話や記述は存在したであろうし、既に始まっていた minstrel show の中にも登場していたであろうから全面的にこの小説に全ての責任を負わせることはできない。しかしそれまで白人社会の中に流布されていたイメージが文章化され集大成されたのがこの小説であると言えるであろう。さらに既に述べている様にこの小説は爆発的に売れた結果、このアーク・クロウの記述箇所を通して同じイメージが同時に全国民に提供され、白人読者の心に一様に刻み込まれたであろうと考えられるのでターナーのこの小説が発生源とする指摘は妥当だと言えるだろう。

しかし小説の中のアーク・クロウには愛する夫のアンクル・トムが売られて行くと言う奴隷制度の非人間的扱いに苦しむ妻の局面があった。一方「アーク・ジェマイマ」にはその要素が欠けている。アーク・クロウが「笑っていて、自己満足している、太りすぎて、生まれながらにして栄養のあるものを与え養育する黒人女性」⁽²²⁾「仕えている白人家庭には何の脅威ともならない無害で従順な黒人」⁽²³⁾お婆さんのイメージに変身させられたのはアンクル・トムから肯定的面を消し否定的イメージにしたもう1つの原因ともなっているのである。それは minstrel show に始まる、その小説の舞台化が原因である。ライスは『アンクル・トムの小屋』が出版されると直ぐに「奴隷制賛成の流儀にのっとって」⁽²⁴⁾ジム・クロウ版のアンクル・トムを演じたと言われている。ライス扮するアンクル・トムも白人に受け入れられる姿だけが強調されたと当然考えられるだろう。これに関してターナーも喜劇風のショーにこの小説を脚色する際に「全ての奴隷制の極悪な局面のほとんどを取り除いた神話的な南部」⁽²⁵⁾を永続させ、ショーに適さない部分を削り取ったと指摘している。この傾向は minstrel show 以外でも見られ、1850年代にジョージ・エイケンの脚本で、ジョージ・ハーワード演出でこの小説が舞台化された際にエヴァを演じた子役がハーワードの娘であったことも原因して、アンクル・トムよりも白人の女の子のエ

ヴァが主人公にされ、ほとんどの場合『エヴァの死』と言う副題が付いていたほどである。そして小説では途中で病死してしまう彼女の為にアंकル・トムが死ぬ最後の場面に彼女が白い鳩に乗って姿を現し、トムが跪き彼女を見上げるところで幕が降りるようにし⁽²⁶⁾、原作とはまるで違うものにしてしまった。しかしこの種の白人の好みに合う様に脚色された劇が人気を博し、南北戦争後は奴隷制度全体ではなくトムの最後の所有者のサイモン・レグリーのような残酷な所有者だけを非難する類いの劇が主流になったと言われている。1879年頃までにこの小説を舞台化して全米中を興行して回る巡業劇団が少なくとも49⁽²⁷⁾あったと言う事実はこの小説がいかにも一般に知られていて、その舞台劇が人気を集めていたかが分かるであろう。しかしその劇中のアंकル・トムの役は1870年代にサム・ルーカスが黒人として初めて主役のアंकル・トムを演じたのは例外で、20世紀に入るまでミンストレルショーの場合と同じく白人により演じられていた⁽²⁸⁾。その中でアंकル・トム像がますますストウ夫人の小説の中のアंकル・トムとは掛け離れて行き、ますます“old-time negro”の面が強調され、結局人々の心に残ったのは後者のイメージであり、結果的に否定的イメージのアंकル・トム像ができあがったと考えられる。

その小説の劇場化に関連して20世紀に入ると映画化が始まった。1903年初めてエドウィン・ポーターによりエジソン会社の為に作られた15分の無声映画ではやはり主役のアंकル・トムは白人が演じていた。そして1914年に初めて黒人としてその役を演じたのがサム・ルーカスであった。彼は舞台でも初めてその役を黒人として演じた役者であるが、当時彼は既に70才を越えた年齢になっていて、ある意味ではその「アंकル」の称号に相応しい年齢になっていたと言える。ここで皮肉なことにストウ夫人が創作段階で曖昧にした年齢的問題が解決されることになったのである。しかしその年齢の為に彼はその映画の中では小さな子供達を持つ父親では無かった。そしてアアント・クロウも同様であった。そしてこのルーカス主演の映画により映像の世界ではこの年若い白人に従順なアंकル・トムのイメージ像が1980年代後半まで受け継がれることになった⁽²⁹⁾のである。

一方白人の手による舞台化の過程の中でアंकル・トムの様にアアント・クロウが白人に都合の良い様に脚色され、それを原形として様々な「アアント」と呼ばれる架空の黒人奴隷が作られ、その中の1つがたまたま「アアント・ジェマイマ」であり、結果的に“old-time Negro”の姿で登場することになったと言える。結局小説『アंकル・トムの小屋』が最初にアアント・クロウの料理上手な姿を白人読者の心の中にしっかりと植え付けていたことに加えて、それと前後して当時の人々、この場合当然白人を意味するのだが、彼等がこの種の舞台化された黒人女性の姿を見慣れていたことが「アアント・ジェマイマ」のイメージを受け入れやすくさせ、その製品をおいしいパンケーキと結び付けさせただけでなく、黒人が商品イメージの中心に据えられているにもかかわらず、何ら心理的抵抗も誘発しなかったのであろうと考えられるのである。

その様に黒人が商品イメージの中心に据えられても白人社会に受け入れられるのは現在ではス

スポーツ用品などもあるが、特に南部を連想させる製品の広告の中では黒人が使われることが多く、それは既に南北戦争以前に始まっていた⁽³⁰⁾とされている。「アーント・ジェマイマ」の広告はまさに正統な南部から生まれた食べ物であることを謳い文句としており、その広告の流れにしっかりと乗っていたと言えるだろう。

しかし実際黒人を商品イメージにするとそれは「黒人用製品」と見なされ、白人の消費者を遠ざける事になりかねなかった。1956年に黒人の歌手ナット・キング・コールがNBCテレビで自身の15分のショーを持った時、そのショー自体はかなりの視聴率であったにもかかわらず契約が更新されなかったのは広告主が黒人番組のスポンサーになることで、彼等の製品が「黒人用製品」と見なされ、当時公民権運動が社会を揺るがし始めていた事もあり南部の市場の敵対心や全国的な白人による不買運動などが起こる可能性を危惧してスポンサーにならなかった事が原因であったと言われている⁽³¹⁾。ジム・クロウ法により黒人の権利を制限したり奪おうとする動きが活発化していた1890年代の当時も、白人をその製品の販売標的にしていた製造会社側はこの「黒人用製品」と見なされる危惧の念を抱いたかもしれない。しかしその様な白人社会の不寛容な動きは“old-time negro”を連想させる「アーント・ジェマイマ」をかえって歓迎したのではないかと推測されるのである。つまり1960年代は白人が築き上げ、保持してきた、望ましい人種世界が崩壊しようとしていた劣勢の時であり、反対に1890年代は北部主導による南部再建時代が終り、南部の白人が望むような人種世界を再構築しようとしていた時、黒人達を元居た場所、つまり“old-time negro”の地位に押し戻そうとしていた優勢な時であった。その心理的余裕の差とこの製品イメージが彼等の求める黒人の姿にうまく合致していた事、さらに既に述べたように南部生まれのおいしいパンケーキの宣伝文句は黒人を商品イメージにすることを許容するであろう事、そして当時「アーント・ジェマイマ」と言う言葉がラットを含めて白人に対しておいしい食べ物を連想させる強力な力を持っている事を会社側は自然に察知していたであろう。それらは「黒人用製品」になるのではないかと言う懸念を払拭するに十分であったと思われる。実際、「アーント・ジェマイマ」は消費者に受け入れられた。そして白人側からも黒人側からもボイコットされることもなく、60年代をも無事に乗り切り現在まで販売され続けている事実はこの製品がタイミング良く時代の流れに乗ったことを証明している。多分これが1950年代ごろに発売されていたら、もはやおいしい食べ物を即座に連想させることもできず、単に「黒人用製品」と白人側からは見られ、黒人側からは人種差別的であると抗議非難の標的になり、販売中止に追い込まれたかもしれない。

ところで「アーント・ジェマイマ」と言う言葉が黒人社会の中で「白人社会に迎合する女性」や「非常に浅黒い肌の黒人女性」と言う否定的意味合いで使われているにもかかわらず、既に述べた様に1980年代にこの製品を購入した人々の55%が黒人であり、この製品が彼等に愛用されていると言う事実は一見矛盾する様に思えるかもしれない。しかし黒人社会の中で奴隷制度の粋が

外れて、奴隷制度の中での白人との関係から生じた否定的イメージでの「アート」と言う言葉はどちらかと言えば本来の姻戚関係からくる「叔母さん」や奴隷制度の中で血縁家族が離散した場合に子供達を共同して育てる支援システムとして発生し、現在でも彼等の社会に於いて頻繁に見られる“extended family”，つまり拡大家族と呼ばれる中での「年上のおばさん」の意味での「アート」にとって代わられたと考えられる。この場合の「アート」は人種関係を含まない肯定的意味で使われており、それらが日常生活の中でもっぱら使われることにより、かつて程は否定的イメージを誘発しなくなっていたのではないだろうか。それと平行して、この製品に付きまってきた架空の伝記も過去の固定観念的イメージも60年代以降薄れ、単なる商標の1つとして存続させようとする企業側の努力もあり、この製品名を聞いただけではもはや差別的なものを黒人達に感じさせなくなっていたのではないだろうか。さらに既に述べたがその製品のパッケージに印刷されている「アトン・ジェマイマ」の顔に同じ人種集団に属する人としての親近感を覚え、かえってそれを購入する気にさせたのではないかと推測されるのである。結局その製品名の由来に関係した過去とその否定的定義はもはや辞書の中に存在するだけであり、その製品自体がその過去を消し去って行く中で否定的イメージの「アトン・ジェマイマ」と言う言葉がいつしか製品とは切り離されて、会話の中で比喩的に使われるだけに過ぎなくなっていたとしたら、その製品の購買者の半数以上が黒人であると言う事実とは何ら矛盾しないと考えられるのである。

「アトン・ジェマイマ」と言う言葉は「アトン・クロウ」の派生語、突き詰めて考えると「アングル・トム」がその原点と言える。しかも「アングル・トム」とは異なり深刻な人種問題を巡る政治的意図では無く、営利目的の為に造り上げられたイメージであるので、それが製品継続の目的でイメージ変更され、次第にその否定的な要素が薄れて行ったのは自然の流れと言えるだろう。しかしその原点であるアングル・トムと言う黒人奴隷の名前と彼の否定的イメージは決して変わる事はないであろう。なぜならば米国史にその名をとどめるハリエット・ピーチャー・ストウ夫人の『アングル・トムの小屋』が小説として当然の事であるが原作のまま存在し続けるであろうし、また米国史の中で奴隷制度が語られる際には必ず言及される象徴的存在で在り続けることは確実であるからである。人種区分と白人が社会の主流を牛耳る人種構造が米国内に存在し続ける限り、「白人に迎合する黒人」と見なされる黒人達が存在するであろうから、このアングル・トムと言う言葉の否定的定義が現実味を失い、黒人達の日常会話の中から姿を消し、その由来であるこの小説が忘れられる時が来ることなど有り得ないであろう。

ところでもしストウ夫人のこの小説で主人公のトムの名前にアングルと言う称号が付いていなかったとしたらどうだろう。その場合、この様な象徴的な使われ方はされなかったかもしれないと考えられるのである。先ず第一に「だれもかれも」の意味で“Tom, Dick, and Harry”と言う表現がある様に、人種に関係なく非常に平凡なトムと言う名前では人種を明確に言い表せない。次に「アングル」を名前に付けるだけとは違って『トムの小屋』の主人公のトムの様に」と小説

の名前を挙げてから引用する余分な手間と言葉が必要となったであろう。さらにトムだけであつたら奴隸制時代に白人の主人一家から一目置かれる黒人奴隸の意味は言い表せなかったであろう。クロウやジェマイマについても同様な事が言える。「アーント・クロウ」の名前はそもそも否定的な象徴言葉として使われてもいない。単に彼女の人物像が「アングル」と対になる「アーント」と言う言葉に凝縮されて引き継がれていったのである。それでもシクロウに「アーント」が付いていなかったら白人に従順で、しかも料理上手な女性の黒人奴隸のイメージを示唆する共通の言葉はクロウか、あつたとしても“Chloe the Cook”の様な称され方しかなかったであろう。その場合、料理上手と言う注釈が付いた「アーント・ジェマイマ」と言う名前が出現したとしても白人に反射的に、しかも一様においしい料理を連想させることはできなかったであろう。そうなるとパンケーキ・ミックスの名前は「アーント・ジェマイマ」ではなくて、「ジェマイマ・ザ・クック」になっていたかもしれない。しかし“the Cook”を名前の後に置いたとしてもそれは単に職業を表わすに過ぎず、必ずしもいつも黒人女性を示唆することにはならないのは確かである。しかも“old-time-negro”を暗示することは絶対に不可能である。それでは「マミー」としての存在を強調して「マミー・ジェマイマ」としたくても「マミー」は名前と一緒に使われてはいないのでこの名前もありそうもないであろう。それに「マミー」は「白人主人一家の世話」をする黒人奴隸であり、直接には料理担当者を意味してはいない。もちろん「ジェマイマ」だけでは女性と言う事以外には人種も料理上手も白人への従順さも示唆することはできなかったであろう。結局ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人が『アングル・トムの小屋』を通して「アングル」と「アーント」の付いた名前の黒人奴隸に対する1つの固定化されたイメージ、たとえその後の黒人人種集団から否定的と非難されるイメージであつたとしても、統一したイメージを米国人全体に広めなかったら、彼女が「アングル」と「アーント」と言う称号を主人公夫婦に付けなかったとしたら、「白人に迎合する黒人」を象徴する言葉はこの小説からは出現しなかった可能性が強いと考えられるのである。そしてアングル・トムとしばしば同じ意味で使われる、J. C. ハリスにより創作された黒人奴隸の物語の語り手である“Uncle Remus”の様に称号として名前に付け加えるだけで「白人に迎合する黒人」の意味を持たせることができ、男性にも女性にも対応できる応用が簡単で効果的な言葉もまた出現しなかったのではないかとさえ思われるのである。敢えてアングル・トムに代わり白人に迎合する黒人を象徴するものを考えて見ると、その最有力候補名は実在の人物で、自らも奴隸出身のBooker T. Washingtonが考えられる。しかしワシントンと言う名字は初代米国大統領と同じであるので「ワシントンの様に」とは言えないであろう。現在でも白人に迎合する典型的な人物として名前が挙げられる際にもフル・ネームが使われている。それに彼の場合は1881年に黒人の為の職業訓練校のタスキーギ・インスティテュートを創設し、黒人の社会的地位向上の為に尽力貢献した教育者として肯定的評価も受けており、彼の名前で否定的イメージだけを伝えることはできないのは明白である。以上の点から評価して

も「アंकル」と「アーク」の言葉の比類のなさが分かるであろう。そしてストウ夫人は彼女の小説を通して南部と言う限られた地域内で成長していた一種のアंकル・アーク文化を全国的に知らせるきっかけを作ったと言えるだろう。

<注>

- (1) 引用：Patricia A. Turner, *Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, New York, Anchor Books, 1994, p.75. (筆者による翻訳)
- (2) 参照：Stuart Bergflexner, *Listening to America*, New York, Simon And Schuster, 1982, pp.332-333.
- (3) 参照：ハリエット・ピーチャー・ストウ著，大橋吉之輔訳，『アंकル・トム的小屋』(上)(下)，東京，(株) 旺文社，1967年。
- (4) 引用： *Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, p.73. 翻訳：『アंकル・トム的小屋』(上)，p.44 & p.46。
- (5) 引用：同上。翻訳：同上，p.254。
- (6) 引用：同上。
- (7) 引用： *Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, p.73. (筆者による翻訳)
- (8) 参照：Kenneth W. Goings, *Mammy and Uncle Mose*, Bloomington, Indiana University Press, 1994, pp.31-32.
- (9) 引用：同上。(筆者による翻訳)
- (10) 引用：同上，p.32。(筆者による翻訳)
- (11) 引用：同上。
- (12) 引用： *Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, p.55. (筆者による翻訳)
- (13) 参照：Jack Salzman/David Lionel Smith/Cornel West, eds., *The Encyclopedia of African-American Culture and History*, New York, Simon & Schuster Macmillan, 1996, p.22.
- (14) 参照： *Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, p.55.
- (15) 参照：Jan Nederveen Pieterse, *White on Black*, New Haven, Yale University Press, 1992, p.155.
- (16) 引用： *Mammy and Uncle Mose*, p.73. (筆者による翻訳)
- (17) 引用：同上，p.28。(筆者による翻訳)
- (18) 参照：Howard L. Hurwitz, *An Encyclopedic Dictionary of American History*, New York, Washington Square Press, 1970, p.445.
- (19) 参照： *White on Black*, p.133 / Philip H. Herbst *The Color of Words*, Main, Intercultural Press Inc., 1992, p.130.
- (20) 引用： *White on Black*, p.153. 参照： *The Color of Words*, p.130.
- (21) 引用： *Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, pp.45-46. 翻訳：『アंकル・トム的小屋』

(上), pp.42-43。

- (22) 引用：*Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, p.45. (筆者による翻訳)
 (23) 引用：同上, p.47. (筆者による翻訳)
 (24) 引用：*White on Black*, p.133. (筆者により翻訳)
 (25) 引用：*Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, p.47. (筆者による翻訳)
 (26) 参照：同上, pp.76-77。
 (27) 参照：同上, p.78。
 (28) 参照：同上。
 (29) 参照：同上, pp.79-85。
 (30) 参照：*The Encyclopedia of African-American Culture and History*, p.20.
 (31) 参照：同上。

<参照>

- Bergflexner, Stuart, *Listening to America*, New York, Simon And schuster, 1982.
 Goings, Kenneth W., *Mammy and Uncle Mose*, Bloomington, Indiana University Press, 1994.
 Herbst, Philip H., *The Color of Words*, Main, Intercultural Press Inc., 1997
 Hurwitz, Howard L., *An Encyclopedic Dictionary of American History*, New York, Washington Square Press, 1970.
 Pieterse, Jan Nederveen, *White on Black*, New Haven, Yale University Press, 1992
 Salzman, Jack/Smith, David Lionel/West, Cornel, eds., *The Encyclopedia of African-American Culture and History*, New York, Simon & Schuster Macmillan, 1996.
 Stowe, Harriet Beecher, *Uncle Tom's Cabin*, New York, Harper & Row, Publishers, 1965.
 Turner, Patricia A., *Ceramic Uncles & Celluloid Mammies*, New York, Anchor Books, 1994.
 ハリエット・ビーチャー・ストウ著, 大橋吉之輔訳, 『アンクル・トムの小屋』(上)(下), 東京, (株) 旺文社, 1967年